

北里大学医学図書館「飯山文庫」

〔来歴と概要〕 この「飯山文庫」を旧蔵されていた飯山家は下野(栃木県)で代々医業をつづけ、当主飯山玄子氏は十九代といわれる。先代の飯山好正氏が同家に伝わる古書を北里大学医学図書館に寄贈され、「飯山文庫」となった。

飯山家に伝わる古文書によると、最初の祖先は飯山大学といい、室町末期の名医曲直瀬道三の弟子といわれる。いつごろから現在の下野に居住していたかははっきりしないが、親鸞の開基になる高田専修寺の門跡の侍医として、はやくから下野の地に在住していたことはあきらかで、以後代をかさねて今日にいたっている。

本文庫の逸品といわれる「平次郎解剖図」は当主から八代前にあたる飯山玄両が、文化二(一八〇五)年に模写したもので、全長一七・六メートル、一卷ものの極彩色の見事な絵巻である。

この原画は、江戸における杉田玄白らの『解体新書』の事業に刺激をうけ、天明三(一七八三)年上方ではじめて小石元俊らがおこなった腑分けを図解したもので、世に「平次郎解剖図」といわれる。

飯山玄両は天保八(一八三七)年六月十五日に七十八歳

で世を去っている。おそらく門跡が上洛したさい、その侍医として随行し、京阪のどこかでさきの解剖図の原画を披見する機会を得、これを模写したものとおもわれる。飯山家には中国の医神の神農の絵図が残っているが、玄両は絵筆をとっても非凡な伎倆の持主であったことが知られる。

かつて、順天堂大学医史学研究室で、同大学所蔵の二巻ものと照合し、同席された故小川鼎三・緒方富雄博士にも一覽していただき、本図があらたに発見された「平次郎解剖図」であることがたしかめられた。

飯山家はその後、眼科の名医土生玄碩とも交遊があり、飯山香雨など教育者としても名をとどめた人物を輩出し、いわば地元の名士として今日にいたっているが、幸いその土蔵に多数の医籍をふくむ古書が残されていたのである。

この文庫のなかには、杉田玄白・華岡青洲らの医書をはじめ、平賀源内や福沢諭吉らの書物がふくまれ、三六四点の小規模な文庫であるが、江戸時代の医学史、科学史はもとより文化史研究にとって貴重な文献がふくまれている。

〔冊子〕「飯山文庫目録」

〔所在地〕〒228-7555 相模原市北里一―一五―一

北里大学医学部

☎〇四二―七七八一―一一

(立川 昭二)